

制度利用 課長職と両立

会社の屋台骨を支える40代、50代の管理職世代は、親の老いと向き合う介護世代でもある。

大介護時代

働きながら

④



一人暮らしをする義父の義勇さん（右）の自宅に定期的に通つ新澤智生さん。突然の仕事に対応するため、パソコンは手放せないという。金沢市、小玉重隆撮影

企業や自治体の情報システムの開発・運営を請け負う「日立ソリューションズ」（東京都品川区）。約1万人いる社員の平均年齢は38歳、4割が40～50代だ。

土日と有給休暇

「もしもし、いま運動の承認をしたので、あくまでもお願ひします」。3月17日月曜日。官公庁向けシステム開発担当の課長・新澤智生さん（38）はスマートフォンで上司に連絡した。年度末が迫り、約50人いる部下の人事手続きを急がなければいけない

智勇さんの妻で義勇さんの長女・奈津子さん（46）が部屋に来た。補聴器をつけた義勇さんの耳元で「買い物行くけど、何買ってくる？」と聞いた。「刺し身が食べたい」と義勇さん。智生さんが笑ってうなづいた。

義勇さんは転倒して腰を骨折して以来、杖で歩き、物を持つのが難しい。一人暮らしになつてから介護保険を申請し、「要支援2」となった。週2回、デイサービスに通い、配食サービスなどを利用しながら暮らしている。

智生さんと奈津子さんは、「東京で一緒に暮のうう」と義勇さんに提案したことがある。洋子さんの葬儀が終わつたすぐ後のことだ。「仮壇にいる家内を一人にはできない」。義勇さんは、申し出に感謝しながらも、首をたぐり振らなかつた。いま智生さん夫婦は月に一度、3日間、父の家を訪れる。飼い犬のしおんど一緒に車に乗り込み、片道7時間、走行距離で約500キロ。土日の休みに加え、月曜日が金融日のもわらかで有給休暇をとる。通院の付き添いや、買い物や掃除など、必要なことをまとめてます。

親しい近所のデイサービスの職員には、奈津子さんの携帯電話の番号を伝えてある。いつまで一人暮らしができるのか、不安はある。ただ

時期だ。

この日、智生さんはオフィスから遠く離れた金沢市にいた。義理の父である新澤義勇さん（93）が一人暮らしをする家だ。智生さんは婿で名字は同じ。段ボール箱の上でパソコンを開く智生さんの隣で、壁に義勇さんがくつろぐ。壁には、2011年12月に亡くなつた義母・洋子さんの遺影が飾られている。

智生さんの妻で義勇さんの長女・奈津子さん（46）が部屋に来た。補聴器をつけた義勇さんの耳元で「買い物行くけど、何買ってくる？」と聞いた。「刺し身が食べたい」と義勇さん。智生さんが笑つてうなづいた。

智生さんは言つ。「家族を助けるのは家族。後悔はしたくない」

ない

約2年前、義理の両親の世話をするため介護休業をとりたいと申し出たことがあり、病と父の世話をほど追われ、疲弊した。自分も金沢に行かない、と思った。

当時の上司は自らも介護の経験があり、人事部などと調整してくれた。その結果、金沢市のサテライトオフィスへ

就職

一時的な軽勤が認められ、仕事を続けることができた。

義母が亡くなつた後、3カ月後には再び東京に戻つた。こ

れで、勤続した

勤続してしまつていただろう。

これからの自分の人生を考え

て、働き続けたい

の間、要介護認定の手続きを進めたり、玄関やトイレに手すりをつけるリフォームをしたりすることができた。

後には再び東京に戻つた。この間、要介護認定の手続きをすりをつけるリフォームをし

たりすることができた。

後には再び東京に戻つた。こ

れで、勤続した

勤続してしまつていただろう。

これからの自分の人生を考え

て、働き続けたい

の間、要介護認定の手続きをすりをつけるリフォームをし

たりすることができた。

後には再び東京に戻つた。こ

れで、勤続した

勤続してしまつていただろう。

これからの自分の人生を考え

て、働き続けたい

の間、要介護認定の手続きをすりをつけるリフォームをし